



↑高校体育館を改修した氷見市役所

旧高校体育館を改修した庁舎 氷見市役所

氷見市の本川祐治郎市長は、「喜ばれない道路、使われない公園、求められない品質の施設を造っても意味がない。まちづくりは『ハードからソフトへ』、ソフトからハードへ』変わってきている認識が必要だ」と話されました。

氷見市の新庁舎は、学校統合で使用されなくなった高校の校舎と体育館を改修して使用。さまざまな行政の課題等について対話を通じて問題解決を目指したため、日本で初めて本格的なフューチャーセンターを置



↑ひみ漁業交流館「魚々座」

いた庁舎です。総事業費は約19億4千万円で、新築で見込まれる額と比べると約10億円費用を抑えることができました。また、体育館のフラットで広いスペースを利用して壁を取り払い各課を配置し、状況に応じ自由に配置変えができるようになっており、非常に機能的な造りとなっています。

庁舎内に入ると、職員全員が立って拍手で私たちを迎えてくれました。また、ホワイトボードがあちこちにあり入口近くのホワイトボードには「歓迎長島の感性を磨く旅御一同様」と書かれてあり、細かいところまで

地方創生における「ぶり奨学金プログラム」の研究と推進に係る覚書の締結

8月3日、氷見市役所で、本町と氷見市、慶応大学SFC研究所の三者共同で、「ぶり奨学金」を中核とした「ぶり奨学金プログラム」を構築する覚書の締結式が行われました。

「氷見の寒ブリ」と「長島町の養殖ブリ」、若者の人口流出という共通の課題を抱えていることから、本町の地方版総合戦略策定副委員長で氷見市の総合

気配りがしてあり、訪れた人をおもてなしする気持ちが表れていました。長島町役場でも他の自治体から視察などがある時は正面玄関付近に書いておくと印象が違ってくるのではと思いましたが、

氷見漁港近くに氷見の定置網や漁具、民具などを一堂に展示した「ひみ漁業交流館魚々座」がありました。

漁具などに実際に手で触れることができるようになっており、当日も夏休みの子供たちが喜んで漁具を触っています。さらに施設の中では、魚の捌き方や魚を使った料理教室を開けるスペースもあり子供たちや都市部の人たちとの交流の場として有効に活用されていました。



↑覚書を交わす川添町長と本川祐治郎氷見市長（中央）、玉村雅敏慶応大学教授（右から2番目）

戦略策定にも携わっている慶応大学の玉村雅敏教授の助言のもと、子育ての負担軽減や若者の定住促進を目的に、高校、大学在学時に奨学金を支給し、卒業後、町に在住すれば返済を免除することを想定した「ぶり奨学金」創設のための、財源の枠組みを共同で研究することとなりました。

締結式終了後、本川氷見市長は「この奨学金が人口の流れを変えるうねりとなるよう期待したい」と、川添町長は「氷見市と共に一日でも早い制度の確立を目指したい」と話しました。

日本一のレタス産地、川上村

川上村は、標高1100mから1500mに位置する立地条件を生かし、レタスや白菜などの高原野菜を中心に発展を遂げてきました。特にレタスは日本一の生産量を誇り、夏秋レタスにおいては、全国生産量の約30パーセントを占めています。

6月中旬から始まるレタスの収穫作業は、10月中旬まで続きます。この間、村民は朝4時から総出で作業を始めるとのことでした。都心部へ野菜を供給する重要な産地のため、安定した価格での取引が可能となり、レタス畑1反あたりの売上額は80万円と高い収益性を持っていますが、農繁期の農業従事者時間を見ると、決して楽なものではないと想像できます。また、農閑期となる冬場は、平均気温が氷点下となることから、農業はほとんどできません。

村では、この農閑期に、文化や芸術のイベントを実施。24時間利用できる図書館なども整備しています。また、女性グループなどは、この農閑期を利用して、海外旅行など余暇を有効活用しており、村役場職員も海外研修に行っているようです。

こういった若者や女性に開かれた村づくりをすすめ、若者にとって魅力ある農村づくりを目標

指していることから、川上村の農業後継者の定着率は高く、全国平均を大きく上回る数字となっています。

「協働」と「交流」小布施町

小布施のまちづくりは先人たちの積み重ねや町の特徴や強みを守りつつ行われていました。栗などの果樹栽培を中心とした「農業立町」、また、文化遺産を生かした「文化立町」としてのまちづくりが大きな二大柱を掲げ、人口政策として宅地分

譲を過去に行っていました。この時、以前からの住民と移住してきた住民の間にはほとんど問題が起きることもなく融合されました。この結果、町民一体となった町づくりが実現できたことと

また、町民主導のまちづくりを大切にしており、行政は町民力が最大限に発揮できるように仕組みをつくり、知ってもらい活用できる環境を整えるため、町外企業や専門機関、地域間交



↑市村良三小布施町長の案内で、小布施のまちづくりを見学

日本一小さい専業農家「風来」

店主 西田栄喜氏

石川県能美市にある、サッカーコート半分面積(約30a)の畑と、小さなハウス3棟で、年間1200万円売り上げる専業農家「風来」を視察しました。

「風来」の店主、西田栄喜さんによると、農業を始めたきっかけは、キムチを売ろうと思ったことが「風来」の始まりということでした。

「風来」では、自然栽培・無



↑「風来」店主 西田栄喜氏

流といった場づくりを実施していましたが、これが、人と人のふれあい(出会い)となり、町の魅力の発信に繋がっているように感じました。

視察研修した小布施町立図書館「まちとしよテラソ」で町長からの話を伺っている時間でもでしたが、実際に町なかを歩きながらの話や地元のかたがたとの会話はとても魅力的でした。

農業・無肥料を基本とし、命の価値観の高い野菜を作ること第一に生産していました。年間50種類以上の野菜を生産することにより、リスクを分散し、それを販売するにも成功・失敗の過程を正直に公開することで買い手に安心を与えていることでした。安心・安全が求められる今の時代、作る過程を公開し、消費者に需要を促すこともひとつの戦略であり、また消費者も買うリスク、食べるリスクを少しでも軽減できる良い方法だと思えました。

作った野菜の販売方法としては、インターネット販売を主にし、フェイスブックなどのSNSを活用し、宣伝広告を行っていました。

野菜単品の販売ではなく、地元産の肉やドレッシングなどと、合わせ売りすることにより付加価値を付け、売上額の底上げを図っています。